

「肥前型器台」の再検討－地域性と型式変遷について－

元長崎県埋蔵文化財センター調査課
宮崎 貴夫

1. はじめに

長崎県考古学会と肥後考古学会は、〈有明海をめぐる弥生文化の交流〉というテーマで、2011・2012・2014年の3回の合同大会を重ねた。2014年は、「肥前型器台」をテーマとして研究会が宇土市で開催された。2015年には、長崎県考古学会と肥後考古学会の合同大会の成果を受けて、長崎県考古学会と九州考古学会との合同研究大会が長崎市で開催された。この研究大会では、「台付甕と各地域の在地甕」と「肥前型器台をめぐる装飾器台」をテーマとして、九州各県と瀬戸内地方の研究者が集い、瀬戸内・近畿地方までを視野にいれた広域の弥生社会について議論をおこなった画期的な研究会となった。

筆者は、2019年にまとめた『長崎地域の考古学研究』(宮崎 2019)の「環有明海とその周辺をめぐる交流と変動」のなかで「肥前型器台」の節を設けたが、肥後考古学会と九州考古学会の両大会で発表した資料の掲載に留まっているので、両大会の成果を踏まえて検討をおこないたい。この小稿では、両大会の成果のなかから「肥前型器台」の地域性と型式変遷について検討したい。

2. 2014年肥後考古学会との合同大会の概要

2014年の肥後考古学会との合同大会では、長崎県(宮崎貴夫)、佐賀県(石橋新次)、福岡県(熊代昌之)、熊本県(菊池川流域:檀佳克、内陸地域:手柴友美子、南部沿岸地域:西山由美子)、鹿児島県(吉本美咲)の九州5県の研究者が弥生時代の「装飾器台」の資料を集成し検討をおこなった。ここで主題となる「肥前型器台」については、「鼓形の器形で、体中位に文様帶をもち上下に長方形透かしをもつ器台」として定義しておきたい。

長崎県の宮崎は、長崎県本土地域で「肥前型器台」が出土する33遺跡を集成し、分布が長崎県北部の佐世保市門前遺跡より以南の長崎県央・県南の地域にまとまっていること、なかでも島原半島南部の南島原市今福遺跡が433点と際だって多いことを報告した。「肥前型器台」は、弥生時代後期中頃・後葉に出現し、古墳時代前葉の布留1式段階まで存続するが、その後に在地系の台付甕とともに消滅することと、時期が下がるに従って「肥前型器台」が縮小化する傾向をもっていることを指摘した。

佐賀県の石橋は、27遺跡の資料を集成し、合計25点の「肥前型器台」が出土して武雄地域のみやこ遺跡、茂手遺跡、納手遺跡が注目された。そして伊万里市宮ノ前北遺跡と唐津市中原遺跡の玄界灘沿岸部で「肥前型器台」が出土していることを指摘した。また、「肥前型器台」の出現の時期については、最も古い例は後期中頃～後葉であり後期前葉の高三瀧式期に遡るものではなく、もっとも盛行する時期は後期後半～終末期であり、佐賀平野西部に古い時期のものが多い傾向がある。下限の

時期は弥生終末期で、古墳時代前期前葉（布留Ⅱ式並行）に下る方形周溝墓に伴う久米遺跡例があるが、これは異なる契機によるもので、「肥前型器台」は布留式期に盛行する精製磨研の小型三種の土器とは共伴していないとした。今後は、①港湾機能を有する流通地点、②中継基地、③流通経路、④流通到達点という視点で「肥前型器台」を見ていく必要があるとした。

福岡県の熊代は、装飾器台を30遺跡64点集成し、福岡県南の筑後地域（18遺跡35点）と以東の北九州地域（8遺跡23点）に分布がすること。北九州地域に分布する器台は、「円形透かし器台」が主体で、少なくとも後期前半には出現しており、その後も「円形透かし器台」が主体となる。一方、筑後地域には後期後半より方形透かしを主体とする器台が分布し、筑後川およびその支流の拠点集落から出土する一群と、矢部川流域、有明海沿岸より出土する一群の二つの地域に分かれるが、「背の

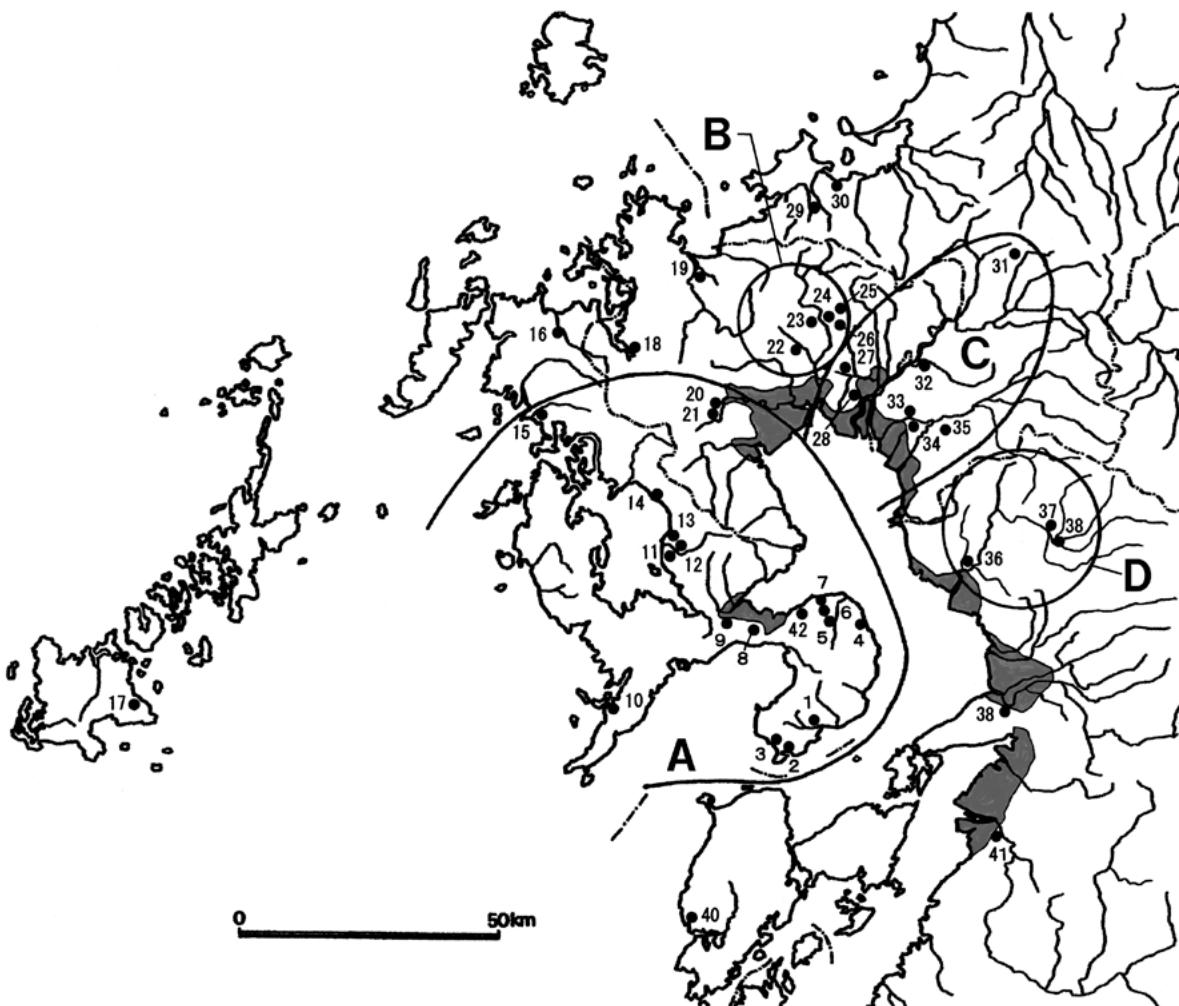


図1 「肥前型器台」の地域圏と関連遺跡

（有明海と八代海の海岸線は、石橋2015文献掲載の下山正一と土井利男『多良山麓研究』1966を参考にした推定ライン。）

A～Dは地域エリアである）

1今福、2口之津貝塚、3辻貝塚、4三会西川、5松尾、6龍王、7佃、8西ノ角、9小野曾屋、10深堀、11竹松、12稗田、13冷泉、14白井川、15門前、16栢ノ木、17橋、18宮ノ前北、19中原、20茂手、21みやこ、22久米、23東山田一本杉、24肥前国府、25惣座、26千住、27牟田寄、28村中角、29三雲、30今宿五郎江、31宮ノ前A、32道藏、33西蒲池池淵、35蒲船津江頭、35山門ガラン・小川柳ノ内、36柳町、37蒲生上の原、38うてな、39宇土城跡城山、40上木原、41下堀切、42守山大塚古墳・丸塚古墳

低いタイプ」の器台が筑後地域では主体となっていることを指摘した。方形透かしの器台は、玄界灘沿岸の糸島地域（2遺跡3点）と福岡地域（3遺跡3点）にも少数が確認されたとした。

熊本県北部菊池川流域について檀は、3遺跡の「肥前型器台」を紹介した。この地域の「肥前型器台」は土器様式において非常に客観的な印象を受ける土器であり、熊本県地域および筑後地域において器台の出土量は必ずしも多くなく、1遺跡の中でも数点程度の出土であることから、生活に密着し存在する土器とはい難く、何らかの祭祀等に伴うような特殊な土器と考えられると報告した。

熊本県内陸地域について手柴は、白川緑川中流域、白川上流域（阿蘇）、球磨川上流域（人吉球磨）の三つの地域にわけてそれぞれの弥生後期土器の様相について整理した。「装飾器台」は、白川緑川中流域から「円形透かし器台」が3個体分確認され、白川上流域で「円形透かし器台」1点だけの出土であり極端に少ない。手柴は、内陸部に適応した「安定的な文化体系が形成」され、沿岸部に広がる「肥前型器台」を用いて行われる何らかの行為や習慣もしくは思想が、独自の文化を形成していた内陸部には浸透しなかったとした。「肥前型器台」の性格を理解する上において有意義な意見である。

熊本県南部沿岸地域について西山は、八代海沿岸および宇土半島と天草地域の4遺跡で「透かしをもつ器台」が出土していることを報告した。宇土市宇土城跡城山遺跡では小片もふくめて10個体分あるが、長方形透かしをもつ「肥前型器台」であり、口縁・裾部端部を拡張している。時期は、弥生時代後期後半から終末のものである。天草市上木原遺跡は、天草灘に向けて広がる谷の上方の傾斜面に立地する遺跡で、弥生後期後半の2号竪穴住居など器台4点が出土している。西山は、城山遺跡、上木原遺跡ともに島原系台付甕の出土も見られ、島原半島との関係が捉えられ、有明海沿岸を中心に分布する「肥前型器台」を補完する資料として評価した。八代平野南部の球磨川下流域右岸に立地する八代市西片百田遺跡・上日置女夫木遺跡は一連の遺跡であり、「肥前型器台」とは異なる3点の「円形透かし器台」が出土している。そして瀬戸内系土器を一括出土している八代市下堀切遺跡の資料も紹介した。

鹿児島県の吉本は、弥生後期前半～終末にかけての鹿児島県域の8遺跡16点の器台を報告した。器台の出土数は非常に限定的で、「円形透かし器台」の存在から瀬戸内地方からの流れがあったことは確認できるが、長方形透かしをもつ「肥前型器台」の出土例は鹿児島県域にはみられないとした。

以上の2014年の「肥前型器台」をテーマとした合同大会では、「肥前型器台」の系譜が北部九州地域には求められず、系譜的に北部九州地域を経由していないこと。「円形透かしの器台」が出土する背景には瀬戸内地方からの流れがあること。しかし、長方形透かしをもつ「肥前型器台」は鹿児島県域では確認できておらず、その分布域は長崎本土部、佐賀平野、筑後平野・熊本県の環有明海沿岸と天草下島に限定されていることが確認されていること。そして、「肥前型器台」には、長崎本土部と佐賀県西部を中心とする「背の高いタイプ」と筑後川・矢部川流域の「背の低いタイプ」が存在することが明確になった。「肥前型器台」をめぐる社会的背景には、北部九州地域以外の弥生時代後半期に瀬戸内地方をバックにもつ〈汎九州〉の地域によって北部九州地域が取り囲まれ、いわば“北部九州包囲網”的な状況がみられるのではないか、ということも議論となつた。

3. 2015年九州考古学会との合同研究大会の概要

2015年の九州考古学会と長崎県考古学会との合同研究大会は、「有明海とその周辺をめぐる弥生時

代の交流」という主題で、「台付甕（および在地系甕）と透かしをもつ器台」の二つの論点をテーマとして開催された。発表者は、長崎県（宮崎貴夫）、佐賀県（石橋新次）、福岡県（上田龍児）、熊本県（檀佳克）、鹿児島県（中村直子・吉本美咲）、宮崎県（河野裕次・葉畠光博）、大分県（坪根伸也）、瀬戸内地方（田崎博之）の〈汎九州〉と瀬戸内地方のメンバーによって発表と討論会が実施された。ここでは、「肥前型器台」と「透かしをもつ器台」の議論についてまとめておきたい。

長崎県の宮崎は、「肥前型器台」の34ヶ所の出土地をあげ、型式編年を試みている。だが今回、両大会の成果を踏まえ、この小稿において編年案の訂正をおこないたい。

佐賀県の石橋は、「肥前型器台」は33遺跡で出土しており、東から神埼三養地域、佐賀大和地域、小城多久地域、武雄地域の4グループにグルーピングし、特徴的な神埼三養地域と武雄地域をとりあげた。神埼三養地域は、4つのグループのなかで14ヶ所と最も「肥前型器台」の出土遺跡が多い地域である。その分布は神埼町から旧千代田町を経て旧諸富町へと南下する筑後川水系の城原川流域に集中しており、吉野ヶ里遺跡に接して南流する筑後川水系の田手川以東には鳥栖市牛原原田遺跡でしか出土しておらず、つまり「肥前型器台」（透かしのある器台）は城原川流域を中心に展開する土器であり、佐賀県域では田手川流域を越えてその東には広がらないとした。城原川流域の最下流には、弥生時代終末期～古墳時代前期に東海、畿内、山陰、山陽地域系の土器が集中して出土した旧諸富町遺跡群（村中角遺跡など）があつて港湾機能が考えられ、港湾一河川で結ばれた城原川流域で「肥前型器台」が出土しているとした。島原半島→武雄地域の恒常的な交流の存在が窺われ、武雄地域の海港を中継基地として佐賀平野を東進し佐賀東部の城原川流域と結ばれたとし、「肥前型器台」が展開する背景には瀬戸内勢力の関与があったと指摘した。

福岡県の上田は、弥生時代後期の「装飾器台」について資料を集成し、北九州地域、筑後地域、福岡・糸島地域の三つの地域に分けて説明をおこなった。北九州地域では、円形透かしが主体であるが、弥生時代後期初頭～前半に出現し、西部瀬戸内系大型器台は弥生時代末～古墳時代初頭の土器に伴う。数量的には客体的で、個体差が大きく安定した器種になっておらず、系譜的には西部瀬戸内系と中～東部瀬戸内系の2者が想定できるとした。土器様式としては成立しておらず、個体差が大きいことから瀬戸内地方からの搬入を推測している。一方、筑後地域では長方形透かしをもつ「肥前型器台」があるが、ほとんどの資料が弥生時代後期末段階のもので、一部古墳時代初頭まで存続し、口縁（脚）端部を拡張し二重口縁状にするみやま市小川柳ノ内遺跡例を最新相とした。筑後地域のなかで、①筑後川流域、②矢部川（及び支流の沖端川）流域を中心に河川沿いや河口付近に分布するのが大きな特徴とした。上下に単純に開く器形で、2段の方形透かし十多条沈線（櫛描直線文）を基本とするが、いつかのバリエーションがあり、口径（底径）と比較して器高が低いものも一定量あるとした。これは、前回の熊代昌也が指摘した筑後川・矢部川流域の「背の低いタイプ」に相当する。

出土遺跡の性格としては、墳墓からの出土例がないことを指摘した。長崎県本土部や武雄地域では墳墓での使用も認められることから注目すべき指摘である。また、出土遺跡が、①河川沿いの大きな集落（みやま市藤の尾垣添遺跡、久留米市道蔵遺跡）②臨海性の集落（柳川市西蒲池池淵遺跡、蒲船津江頭遺跡）であることが最大の特徴とした。多地域で製作された「肥前型器台」が、海域や河川を介して、集落に搬入されたこと。また、器高が低い一群が、一定量あるところから現地製作の型式であることを推測した。

福岡・糸島地域では、糸島市三雲遺跡や福岡市今宿五郎江遺跡で「肥前型器台」が出土しており、有明海沿岸から最も離れた玄界灘沿岸部の中核となる遺跡での出土例である。単発的な存在であり、「肥前型器台」の分布域から搬入された資料として注目される。上田は、「肥前型器台」の主要な分布圏外においては、国邑レベルの拠点集落（三雲・今宿五郎江・平塚川添遺跡）で出土する点が注目できるとした。

熊本県の檀は、5つの遺跡から出土した方形透かしをもつ器台をあげ、胎土が在地土器と大差ないことから地元で製作されているが、土器様式のなかに普遍的に存在する器形ではないと指摘した。

鹿児島県の中村は、鹿児島県の器台は弥生時代後期から終末期の器台が川内平野部と肝属平野部で8遺跡から計16点出土しているが、多条沈線をもつもの、円形透かしをもつもの、小さな円形透かしもの、透かしないものがあるが、長方形透かしをもつ「肥前型器台」は出土していないとした。

宮崎県の河野は、瀬戸内地方の影響のもとで弥生時代後期前葉に器台が在地器種として成立し、弥生時代後期中葉から徐々に増加して後期後半以降に器種組成のなかで定着するが、「円形透かし器台」が主体である。方形透かしを持つものは、熊野原遺跡B地点と前畠遺跡で確認されているが、双方共に「肥前型器台」とは異なる要素をもち、宮崎県には「肥前型器台」は出土していないとした。

大分県の坪根は、大分県では「肥前型器台」の出土は認められない（筑後川上流域にあたる日田地域は除く）とした。これに対し、円孔などの装飾をもつ瀬戸内系の「装飾器台」は別府湾沿岸地域で認められ、ほぼ海岸部とその近隣の遺跡に限られている。「装飾器台」や「大型器台」については、墓域を含む祭祀遺構や、河川・海上交通の要地としての機能を担っていたと推定される遺跡からの出土が認められ、器形や文様構成から西部瀬戸内系大型器台の伝播の脈絡で理解でき、両地域の波状的かつ濃厚な関係性と交流の様相を示しているとした。

近畿・瀬戸内地方を担当した田崎博之は、大きさから小型、中小型、中大型、大型に大別して、近畿・瀬戸内地方の器台の変遷を論じた。田崎博之が追加資料として提示した図「『肥前型器台』をとりまく九州東半部・瀬戸内・近畿の器台」は、「装飾器台」の状況を九州地方から瀬戸内・近畿地方の〈汎西日本域〉の視野で概観できる今回のもっとも際だった研究成果として評価できる。

以上の合同研究大会での検討結果から、「円形透かし装飾器台」については、東九州地域や南九州地域、有明海沿岸部まで分布しており、瀬戸内地方系の装飾器台が九州東岸を南下し、南九州から反転して九州西岸を廻る海上ルートで有明海まで入ってきたことが推測される。しかし、長方形透かしをもつ「肥前型器台」は、瀬戸内地方から東九州と南九州地域において具体的な資料をおさえることができなかつたことになる。すなわち、様式的には瀬戸内地方系の「装飾器台」の影響を受けていることが想定される「肥前型器台」が、瀬戸内地方との直接的なルートを跡づける直接的な証拠をおさえられず、弥生時代後期後半に環有明海沿岸に突然に出現するという現象だけが確認されたことになった。しかしこの事象に関して注目できるのは、上田龍児と田崎博之が参考資料としてあげた方形透かしをもつ木製器台である。上田は柳川市蒲船津江頭遺跡、田崎は福岡市今宿五郎江遺跡、雀居遺跡の長方形透かしを施した裾部片をあげている。破片であり体中位に施される文様帶部分を欠いているために全形がうかがえないという難点があるが、長方形透かしをもつ器台形木製品が瀬戸内地方で製作され、それが有明海域にもたらされ、器台形土器として「肥前型器台」が成立したことも想定しなければならなくなつた。今後の器台形木製品の出土を注意し、その可能性についても検討していく

たい。

4. 「肥前型器台」の地域性について

2014年と2015年の両大会の成果によって、「肥前型器台」の分布域について概観することができるようになった（図1）。ここでは、A・B・C・Dの四つ地域とその他の地域について概要を述べたい。すなわち、「エリアA」は、「肥前型器台」の「背の高いタイプ」（「肥前型器台A」）の中心域である長崎県本土部の佐世保市門前遺跡以南の県央・県南部の地域と佐賀県西部の武雄地域までを含む領域である。「エリアB」は、佐賀県の嘉瀬川・牛津川の流域である。「エリアC」は、「背の低いタイプ」（「肥前型器台B」）をもつ佐賀県から福岡県にまたがる筑後川水系と福岡県の矢部川流域である。「エリアD」は、熊本県の菊池川流域である。なお「エリアC」については、筑後川水系と矢部川水系の水系ごとに独自の社会集団を構成していたことは言うまでもなく、あくまで「肥前型器台」の地域性において共通性をもっているとして捉えたエリアであることをことわっておきたい。

また、「エリアC」の村中角遺跡、蒲船津江頭遺跡、「エリアD」の柳町遺跡は、入江に面した立地から河川水系の集落への内陸水運のための上田龍児がいう臨海性の「港湾集落」として評価できよう。また「肥前型器台」が出土している宇土市城跡城山遺跡は、入江に面した臨海性の「港湾集落」であり、「円形透かし器台」が出土している新御堂遺跡も同じ入江に面している。東側に位置する緑川・白川流域の遺跡では「肥前型器台」が確認されていないため、「海域ネットワーク」で結ばれた点的な港湾集落として捉えておきたい。島原半島系の台付甕が出土おり、島原半島南部の海民が城山遺跡に定着し、口縁・裾端部を拡張した「変異型」の「宇土城山タイプ」を創出したことが推測される。天草灘に面している上木原遺跡も、「肥前型器台」とともに島原半島系の台付甕・壺・高杯が出土しており、城山遺跡と同様に島原半島の海民の行動域を示す資料として理解でき、天草灘から薩摩地域と結んだ外海域を航海する海民ネットワークの結節点となる遺跡とみておきたい。

また、玄界灘沿岸域で「肥前型器台」が出土している遺跡は、伊都国、奴國の中核集落とその拠点を結ぶ海上交通路の集落であって、「エリアA」地域の海民が北部九州地域の中心域である伊都国・奴國へ向けて海運・交易活動の足跡をたどることができる資料である。「エリアA」地域から玄界灘沿岸へかけての海域は、「海村」や「港湾集落」が「海域ネットワーク」で結ばれ、海民が往来する「海域社会」であったことを想定しておきたい。そして、「エリアB」「エリアC」「エリアD」地域については、大河川が形成した平野部にあって河川水系が動脈となって拠点集落と周辺小集落が「平野部ネットワーク」で結ばれ、河沿いに船着き場をもった「流域社会」として想定しておきたい。そして河口付近にある「海村」、「港湾集落」は、「海域社会」と「流域社会」を結ぶ接点であったと推測できる。このような分布域を視野に入れて「肥前型器台」の型式変遷を検討していきたい。

5. 「肥前型器台」の型式変遷について

「肥前型器台」の名称については、小田富士雄が2004年の「長崎県・景華園遺跡の研究」の結語のなかで、それまで「透かしのある器台」あるいは「透かし窓をもつ器台」と呼ばれていた環有明海沿岸を中心として分布する長方形透かしをもつ独特の器台について、「肥前型器台」の名称を提唱し

たことを嚆矢とする（小田・上田 2004）。この名称については、石橋新次が2回の合同大会で「西肥前型器台」という名称を使用し（石橋 2011・2012）、2014年の宇土大会においても「有明海型器台」と「肥型器台」の提案があったが、ここでは、「肥前型器台」の名称を使って説明をおこないたい。

「肥前型器台」は、弥生時代後期後半に瀬戸内地方系の「装飾器台」の影響を受けて、環有明海沿岸においていきなり突然に出現するという印象を受ける独特な土器である。その源流となる瀬戸内地方の器台形土器については、大橋雅也の岡山県吉備地域の型式変遷の研究がある（大橋 1992）。大橋の研究によれば、北部九州地域の編年で弥生後期前葉の高三漬式新段階に相当する後Ⅰ期の長方形透かしをもつ第3段階の器台（図2）が「肥前型器台」に類似しており、石橋新次は2012年の肥後考古学会と長崎県考古学会の合同大会のなかで、この第3段階の器台の影響を受けて「肥前型器台」が成立することを指摘している（石橋 2012）。筆者もその意見に賛同するが、とくに体部中位ヘラ描き文様帶で上下二段の長方形透かしになっている図2の11と12（門前池遺跡）が、同じモチーフをもつ「肥前型器台」の直接的なモデルになったことを推測できる。

「肥前型器台」の型式変遷については、2004年に「長崎県・景華園遺跡」のなかで共著者である上田龍児が試みた研究がある（小田・上田 2004）。上田は、口縁端部の形状と体中位の文様に注目し、型式変遷の指標にして「器台」の変遷図を作成している。すなわち、口縁端部はA：丸みないし方形、B：上方に肥厚、C：二重口縁にAからCへと変化すること。体中位の文様は、I：突帯、II：ヘラ描、III：櫛描、IV：なしのIからIVへと変化すること。それらの属性が相関して型式変遷しているこ

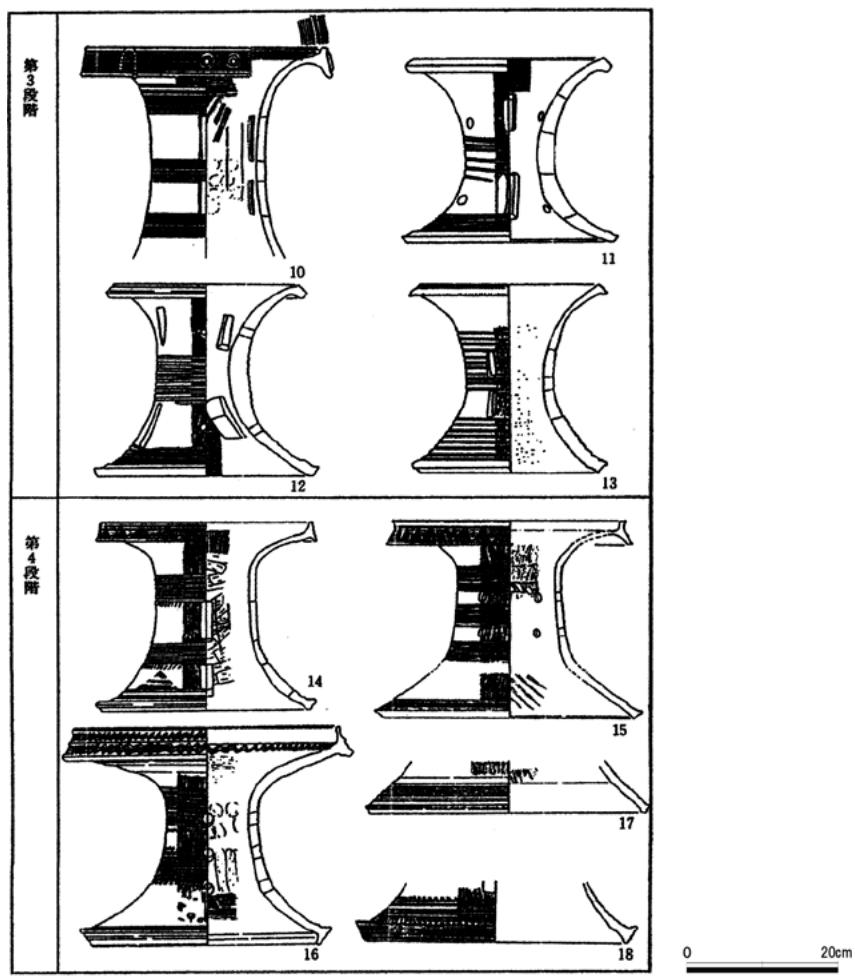


図2 瀬戸内系器台 (11～13は岡山県門前池遺跡 1/10)

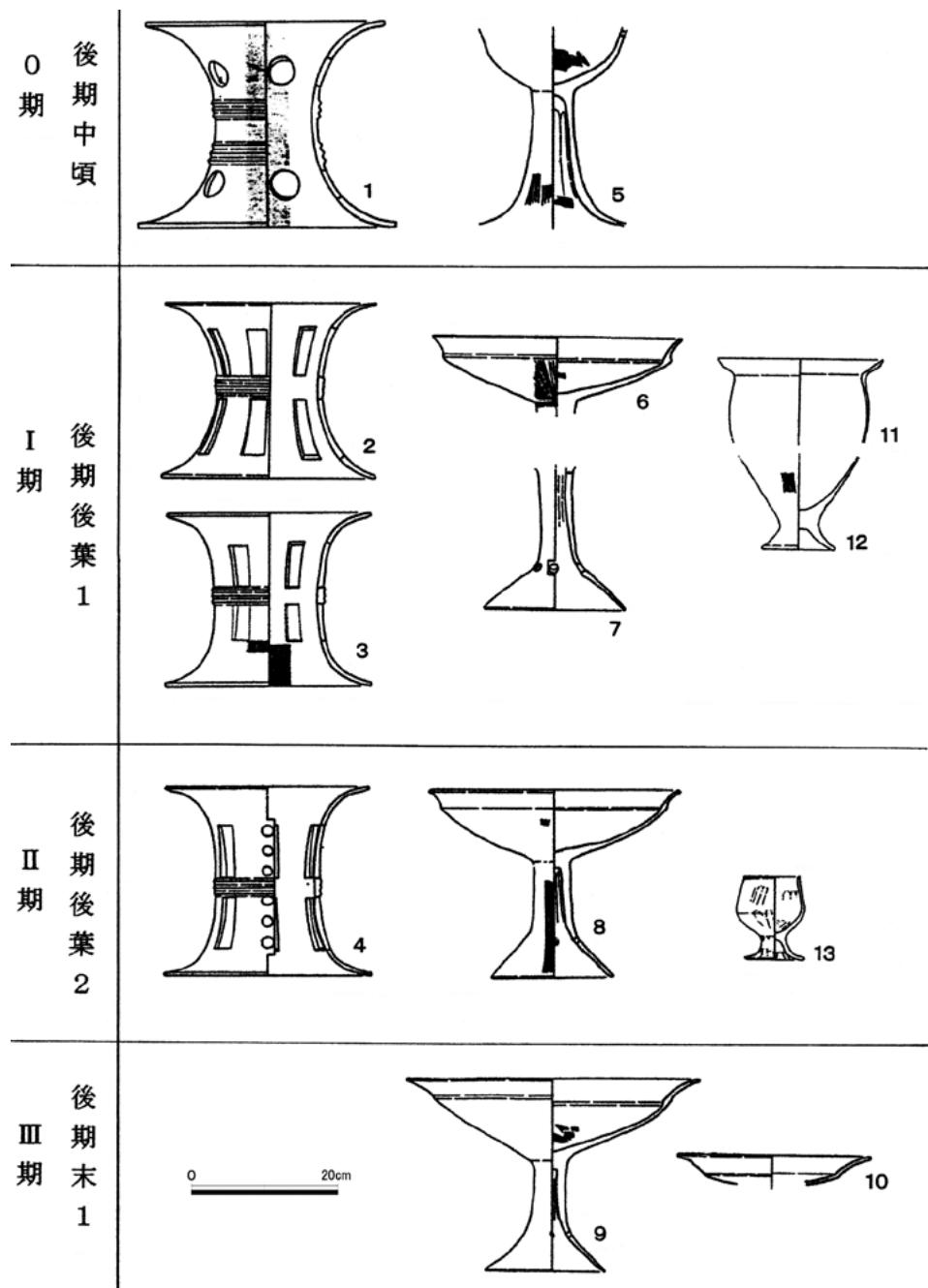


図3 みやこ遺跡SK 324の土器編年案 (1/10)

とを論じている。そこでは、上田が型式変化の指標としている体中位文様の「突帯→ヘラ描→櫛描→なし」という大きな流れに注目していきたい。そして、筆者が2014年の肥後考古学会との合同大会で指摘した「肥前型器台」の大きさの「縮小化」傾向が型式変遷と組み合っていることを検証しながら、「肥前型器台」の型式変遷を検討していきたい。

(1) 佐賀県みやこ遺跡・茂手遺跡の「肥前型器台」の変遷 (図3)

上田龍児が『器台』の変遷において示した最も古い弥生時代後期後葉（新段階）として位置づけられるものが、佐賀県武雄市みやこ遺跡SK 324の一括出土資料（原田編1986）である。上田は、みやこ遺跡では、「墓域の中心に設けられた祭祀土壙」から高杯・壺・甕と「器台」が出土していること、「墓の数に対して、祭祀土壙の数が少ない」ことから、「複数の墳墓に対して行われた祭祀の土器を、

一括して土壙に廃棄したものと捉えるのが妥当」として、祭祀土坑が複数の葬祭に使用されていることを指摘している。すなわち祭祀土壙内の土器が時間幅をもっているということであり、高杯の形態などから見ると、幾度かの祭祀儀礼があつて時間幅をもつことが推測できる。高杯には、鋤先形口縁の島原系高杯5と、屈曲した杯部をもつ北部九州系高杯6～10の二者があり、形態などから時期幅をもつことが推測できる。0期（後期中頃）としたものは、体部に三条突帯を二ヵ所貼付けた円形透かしをもつ器台1で、島原系高杯5と組み合わさる。蒲原宏行編年（蒲原2019）の千住1式に相当する段階である。I期（後期後葉1段階）は、体中位に3条突帯をもち上下に長方形透かしを施す「肥前型器台」2・3で、体中位幅が16センチある。北部九州系高杯6と組み合わさる。蒲原編年千住2式に相当する。このI期に「肥前型器台」が出現したと想定する。II期（後期後葉2段階）の「肥前型器台」4は、体中位の3条突帯と長方形透かしの他に縦に三つ並んだ小さな円孔を上下に施している。

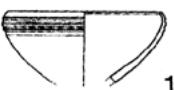
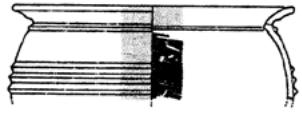
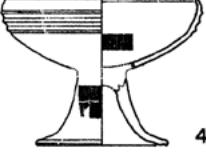
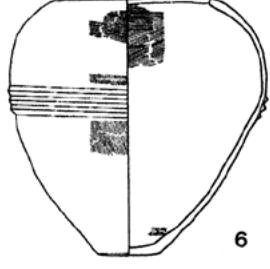
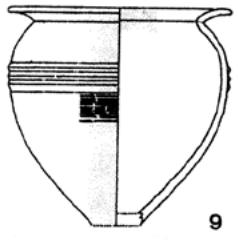
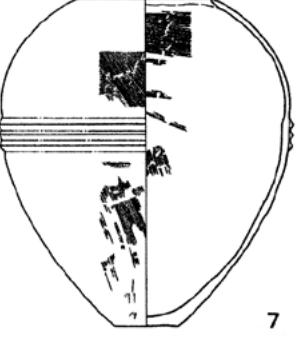
器種 時期	高杯B	壺	丹塗甕
中期末	 1		
後期初頭	 2  3		 8
後期前葉	 4	 6	 9
後期中頃	 5	 7	

図4 島原半島の「見かけ3条突帯」土器(1/10) 1口ノ津貝塚、2佃遺跡、その他は今福遺跡

体中位幅は15センチである。北部九州系高杯8と組み合わさる。蒲原編年の惣座0式に相当する。Ⅲ期（後期末1段階）は北部九州系高杯9・10である。蒲原編年の惣座1式、久住猛雄編年（久住1999・2015）のIA期に相当する。みやこ遺跡SK324については、以上の変遷を想定している。

（2）今福遺跡の「見かけ3条突帯」の高杯・壺・丹塗甕（図4）

「見かけ多条突帯」とは、三角突帯を1条ずつ貼り付けるものでなく、粘土帯を強くナデつけることによって多条突帯とした手法である。今福遺跡の弥生土器を実測している中で、この手法の存在に気づいた（宮崎編1985、町田・宮崎編1986）。今福遺跡では、弥生時代後期初頭～中頃の丹塗甕・壺・高杯に「見かけ多条突帯」が認められる。2条や4条もあるが、3条が最も多く主流である。その編年案を図4に示した。高杯は、筆者が2019年にまとめた『長崎地域の考古学研究』のなかの「環有明海とその周辺をめぐる交流」で椀形の杯部に2～3条の「見かけ多条突帯」をめぐらす「高杯B」としたものであり、その原型となる高杯は南島原市口之津貝塚の報告書（古田・松藤他1975）で松藤和人が一種の凹線文をもつ台付鉢としたもの（図4-1）を見ることができる。すなわち高杯Bは、瀬戸内地方の凹線文高杯の凹線文手法を知らずに凹と凸の関係を逆転して捉え、結果的に「見かけ3条突帯」が主流となって在地化した高杯であると想定している。

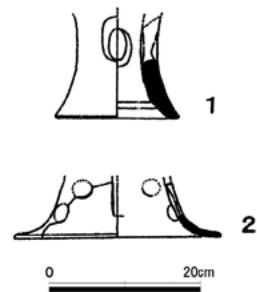
島原半島の今福遺跡では、この「見かけ3条突帯」の丹塗甕・壺・高杯が弥生時代後期初頭～後期中葉の段階に成立している。このことから、今福遺跡では体中位に突帯をもつ「肥前型器台」が成立する前提として、「見かけ3条突帯」の製作手法があったことが考えられる。武雄市みやこ遺跡と茂手遺跡で出土している体中位に突帯をもつ器台も「見かけ3条突帯」である。そのことから「見かけ3条突帯」の手法を前提にする地域において、「肥前型器台」が出現したことを推定することができる。

（3）長崎県本土地域の「肥前型器台」の変遷案（図6）

長崎県本土地域では、現在、「肥前型器台」が出土している遺跡の数が41ヵ所に増えており、それは前述した大村市竹松遺跡の祭祀遺構2など、西九州新幹線建設に伴う発掘調査の調査成果によるところが大きい。出土一覧表の掲載については、紙数により省きたい。

「肥前型器台」に先行する0期（後期中頃段階）の資料は、南島原市今福遺跡A地区土器溜で「楕円形透かし器台」1と「円形透かし器台」2が出土している（図5）。「楕円形透かし器台」は、分厚いつくりの筒型器台に楕円形の孔を開けたもので、在地で製作されたものと推測される。「円形透かし器台」については、長方形透かしも施されているところから、図5「肥前型器台」以前の透かし器台（1/10）円形透かしと長方形透かしがミックスされた形状であり、「肥前型器台」成立直前の段階の製品として想定しておきたい。

長崎県本土地域の弥生時代後期後半～古墳時代初頭前後の土器編年の最近の研究では、2017年に九州前方後円墳研究会が「九州島における古式土師器」の編年について検討をおこない、2018年に馬場晶平が『西海考古』第10号に肥前西部の編年についてまとめている（馬場2018）。この2017年の九州前方後円墳研究会の成果によって、大村市冷泉遺跡6号住居跡出土土器が布留0式期に位置づけられ、これを基点とした長崎県本土部における編年を構想できるようになった。



ここでは、佐賀平野の蒲原編年と北部九州地域の久住編年とを参考にしながら、長崎県本土部における「肥前型器台」の編年案を試行してみたい（図6）。I期（後期後葉1段階）資料は、体中位に「見かけ3条突帯」をもつ資料であり、島原市三会西川遺跡30（松藤・古田他1975）、南島原市今福遺跡B地区3号溝（濠）II・III層、今福遺跡A地区土器溜32、辻貝塚（藤田編1998）、大村市竹松遺跡祭祀遺構2（6）（古門編2018）と同遺跡包含層出土品（杉原編2020）があるが、分布は島原半島に偏っている。体中位幅は16センチほどである。II期（後期後葉2段階）資料は、今福遺跡B地区3号溝（濠）I層出土品37（宮崎編1985）があり、体中位の文様はヘラ描沈線文で、縦に三つ並んだ小さな円孔を施す。体中位幅は14センチである。竹松遺跡祭祀遺構2でも出土している（7・8）。竹松遺跡祭祀遺構2は弥生時代後期初頭～後期末1段階まで継続して葬祭行為がおこなわれていたことが推測される。北部九州系高杯と島原系高杯が同時に使用されており、6～8は島原半島から搬入されたことが推測される。III期（後期末1段階）は竹松遺跡の祭祀遺構2出土品と同遺跡TAK 201403-3区SC3（住居跡）出土品9（中川編2019）がある。体中位の文様は櫛描文で、体中位

表1 龍王遺跡住居跡の切り合い関係と編年案

III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期
14区SB4	13・14区SB8	13・14区SB6			
	14区SB1		14区SB2		
	22区SB4	22区SB5		12区SB1 方形環溝（古）	5区SB1 方形環溝（新）

幅は13.8センチである。III期から櫛描文が主体になってくる。IV期（後期末2段階）以降の資料については、雲仙市龍王遺跡（辻田・小野編2008）の住居跡切り合い関係から変遷ができる（表1）。

IV期（後期末2段階）は、龍王遺跡14区SB1出土品41があり、体中位の文様は櫛描文で体中位幅は11.7センチである。しかし小片であるため、ここでは佐世保市門前遺跡墳丘墓2号集石土坑出土品1（副島編2006）を典型例としてあげる。体中位幅は12センチである。V期（古墳前期1段階）は、龍王遺跡13・14区SB6（註1）出土品48・49（辻田・小野編2008）がある。48の体中位は櫛描文で、体中位幅は10センチである。49は裾径14センチの小型品である。この段階で極小品が出現していることが注目される。大村市冷泉遺跡6号住居跡出土品14（大野他編2003）も同期資料である。体中位は櫛描文で、体中位幅は8.5センチである。VI期（古墳前期2段階）は、雲仙市松尾遺跡土坑出土品56（辻田編2002）がある。体中位の文様がなくなり区画線が入る資料で、体中位幅10センチである。VII期（古墳前期3段階）は、諫早市小野曾屋遺跡5層出土品24（川瀬編1995）と大村市稗田遺跡住居跡出土品16～18（橋本・稻富編1988）がある。小野曾屋資料は、体中位の文様は不明で、体中位幅は8センチである。稗田資料は、体中位文様が櫛描文であろう。体中位幅は6.5センチと6センチである。このようにI期（後期後葉1段階）からVII期（古墳前期3段階）では、体中位幅が16センチから6センチ、口縁・裾部径が28センチから18センチへと小型化の傾向が極小化を遂げており、このVII期段階で祭具としての役目を終えたのであろう。

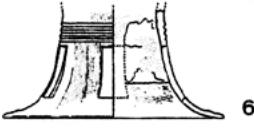
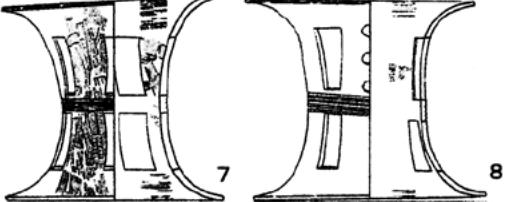
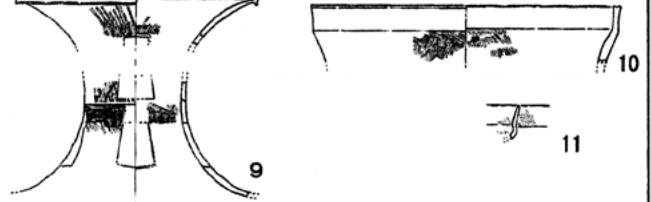
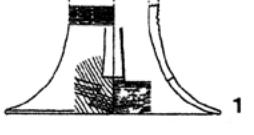
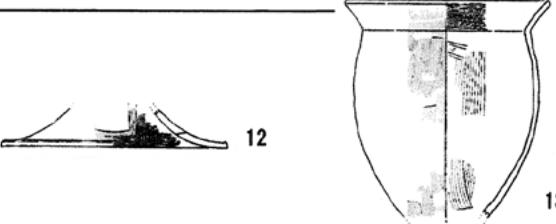
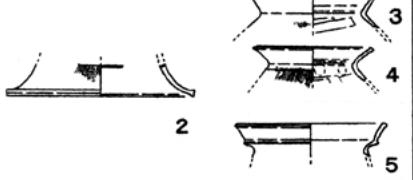
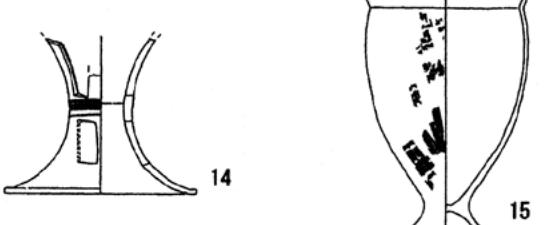
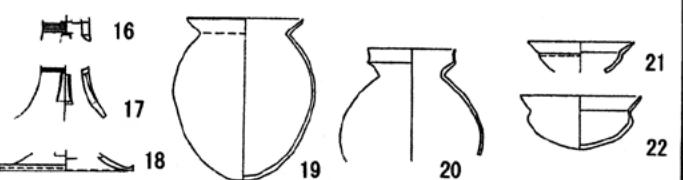
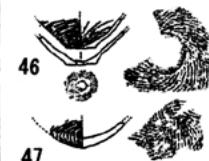
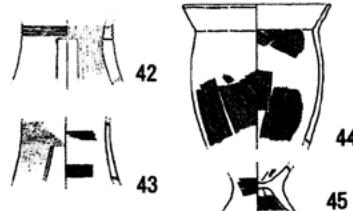
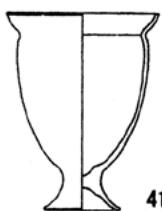
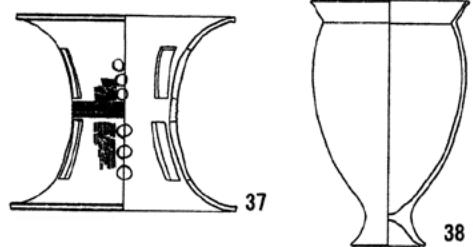
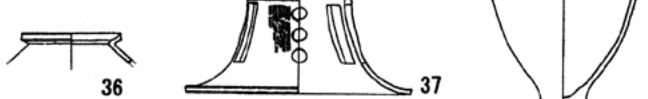
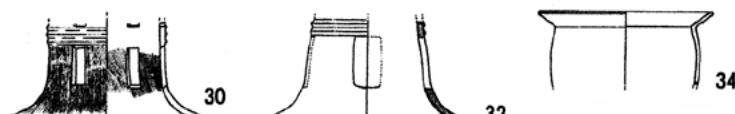
	県北（門前）	大村
I 期		 6
II 期		 7 8
III 期		 9 10 11
IV 期	 1	 12 13
V 期	 2 3 4 5	 14 15
VI 期		
VII 期	<p>1. 門前 2号集石土坑 2~5. 門前 2号住 6~7~8. 竹松祭祀遺構 2 9~11. 竹松 3区SC 3、 12~13. 竹松 8区SP1081 14~15. 冷泉 6号住 16~22. 稗田住</p> <p>0 20cm</p>	 16 17 18 19 20 21 22

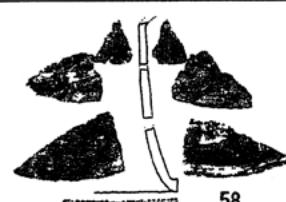
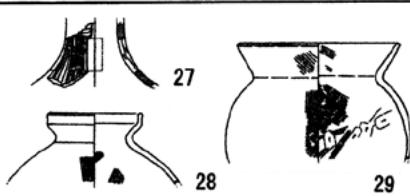
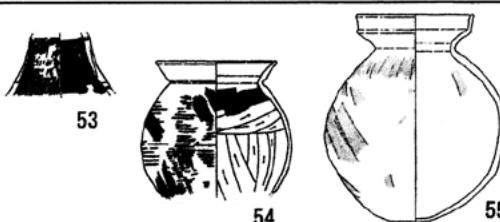
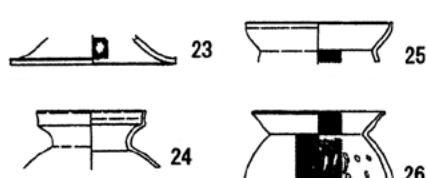
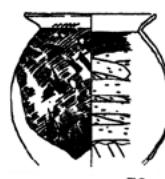
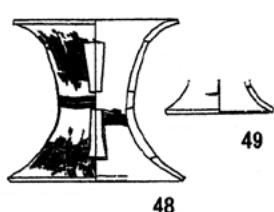
図6 長崎県本土地域の「肥前型器台」編年案 (1/10)

諫早

島原半島



23~26. 有喜上原2号住 27~29. 小野曾屋5層
30・31. 三会西川溝 32. 今福A地区土器溜
33~35. 今福B地区3号溝II・III層
36~38. 今福B地区3号溝I層 39. 龍王14区SB4
40・41. 今福C地区住 42. 龍王13・14区SB5
43~45. 龍王14区SB1 46・47. 龍王SB4
48~51. 龍王13・14区SB6 52. 龍王22区SB5
53~55. 龍王14区SB2 56・57. 松尾土坑
58. 丸塚古墳



0 20cm

表2 長崎県本土地域の弥生後期後葉～古墳時代初頭前後の土器編年案（ゴチは肥前型器台出土遺構）

時期	県北（門前）	大 村	諫 早	島原半島北部	同・南部（今福）
I 期		竹松祭祀2	西ノ角住居	三会西川溝	B区3号溝II・III層
II 期		竹松祭祀2			B地区3号溝I層
III 期		竹松祭祀2 竹松3区SC2		龍王14区SB4 十園26区SD1・2	C区住
IV 期	2号集石土坑	竹松B8区SP1081		龍王13・14区SB5 龍王14区SB1 龍王22区SB4	
V 期	2号住	冷泉6号住 竹松円形周溝墓		龍王13・14区SB6 龍王22区SB5 佃84区SK1	
VI 期		竹松集積SU6	有喜上原2号住	松尾土坑 龍王14区SB2 龍王31区SB1 龍王方形環濠（古） 守山大塚古墳？	
VII 期		稗田住居跡	小野曾屋5層	龍王12区SB1 龍王方形環濠（新） 丸塚古墳？	
VIII 期				龍王5区SB1	

この他に雲仙市丸塚古墳から出土した器台58がある（古田1978）。破片であって透かしの有無は明確でない。器台裾端部を肥厚して刻目を施すなど、これまで見てきた「肥前型器台」とは異なる印象を受ける。VII期（古墳前期3段階）に位置づけたい。大橋雅也は、器台の変遷において「農耕祭祀から「首長靈繼承祭祀儀礼」への発展を想定（大橋1992）している。丸塚古墳出土器台は、極小化した「肥前型器台」に比べると大きく、集落や共同墓地などで使用されている「肥前型器台」とは別に「古墳祭祀」の文脈を考慮すべきであろう。また両大会では、「肥前型器台」の祭祀内容について検討をおこなったが、大橋の指摘する「農耕祭祀」のみならず、濠の埋没、住居の廃屋、葬祭などのさまざまな祭祀儀礼に用いられており、島原半島の海民が「背の高いタイプ」の「肥前型器台」を運んでいたことを推測すれば、「航海安全」など海事関係の祭祀があったことも想定できよう。

「肥前型器台」のI期～VII期の変遷については、佐賀平野の蒲原宏行編年（蒲原2019）と北部九州地域の久住猛雄編年（久住1999・2015）に対応することができる。I期（後期後葉1段階）は蒲原編年の千住2式に相当する。II期（後期後葉2段階）は、蒲原編年の惣座0式に相当する。III期（後期末1段階）は、蒲原編年惣座1式と久住編年IA期に相当する。IV期（後期末2段階）は、蒲原編年惣座2式と久住編年IB期で、北部九州編年の西新式に相当する。V期（古墳前期1段階）は、久住編年IIA期で畿内の布留0式（古）に相当する。VI期（古墳前期2段階）は、久住編年IIB期で畿内の布留0式（新）に相当する。VII期（古墳前期3段階）は、蒲原編年の土師本村1式と久住編年IIC期で布留1式に相当する。「肥前型器台」は、IV期以降から小形化の傾向をもち始め、このVII期の布留1式段階をもって消滅することになる。VIII期（古墳前期4段階）は、蒲原編年の土師本村2式と

久住編年ⅢA期で、布留2式に相当するとしておきたい。

表2は、長崎県本土地域の弥生時代後期から古墳時代初頭前後の土器編年案である。竹松遺跡で円墳とされているものは、墳丘墓なのか円墳なのかの評価が難しく、ここでは竹松円形周溝墓とした。この遺構では「肥前型器台」は出土していないが、九州前方後円墳研究会によって出土土器は蒲原編年のタケ里式に相当する（中川編2019）とされており、ここではV期（古墳前期1段階）に置いた。

（4）「肥前型器台」の型式変遷案（図8）

「肥前型器台」の変遷を地域ごとに試案したものが図8である。体中位に「見かけ3条突帯」をもつ「肥前型器台」が出現するのがI期（後期後葉1段階）であり、「Aエリア」の武雄地域と島原半島地域の資料に限られている。両地域は、有明海の「海域ネットワーク」で結ばれてつながりが深いことを石橋新次が指摘している。どちらかで「肥前型器台」が創出されたかということは、現時点では決めがたいが、同じ意識をもって祭祀具として使用していたことだけはいえよう。

II期（後期後葉2段階）には、体中位にヘラ描沈線文をもち上下に小さな円孔を縦に施す「肥前型器台」が島原半島南部の今福遺跡にみられるが、「Bエリア」の佐賀市東山田一本杉遺跡で同様な形状の資料が出土している。地元で製作された製品ではなく、「Aエリア」からの搬入品の可能性がある。武雄地域では突帯で同じモチーフの資料13がある。また、茂手遺跡SK509には突帯をもち「背の低いタイプ」14がある。この遺構も祭祀土坑で、出土土器は時期幅をもっており、この段階に想定した。「Cエリア」では、港湾集落の佐賀市村中角遺跡で「背の低いタイプ」の器台24があり、この段階に出現して、このタイプの系列が続くことになる。25は、上田龍児が河川沿いの比較的大きな集落とした久留米市道蔵遺跡から出土した口縁が受け部状に開いた資料であり、「背の低いタイプ」の「変異型」の資料であろう。「Dエリア」の菊池川流域には、蒲生上の原遺跡の2条突帯と小孔をもつ資料34がある。これも「背の低いタイプ」の「変異型」の資料であろう。その他の地域では、糸島市三雲遺跡で1条突帯の39があり、これも「背の低いタイプ」の「変異型」の資料としてよい資料である。編年案（図8）に漏れた資料として「Bエリア」の肥前国府跡出土品（図7）がある。体中位に長方形透かしと上下に2条突帯をもつ資料であるが、「背の低いタイプ」「背の低いタイプ」の「変異型」の資料として補足しておきたい。

このII期に「Cエリア」で「肥前型器台」の「背の低いタイプ」が在地土器として成立し、「Aエリア」の武雄地域、「Bエリア」、「Dエリア」、玄界灘沿岸の糸島地域の三雲遺跡までに至る広域なエリアに「変異型」が出現したことに注目しなければならない。それには、港湾集落を結んだ「海域ネットワーク」を往来した海民が関わっていることが想像できる。このように「変異型」については、「肥前型器台」を地元で必要に応じて模倣して製作し使用した器台として理解したい。

III期（後期末1段階）は、「Dエリア」以外に資料があり、「Aエリア」の武雄地域の茂手SK422などでは縮小化の傾向は認められないが、「Bエリア」の千住遺跡21では縮小化の傾向が捉えられるようである。「Cエリア」の佐賀市牟田寄遺跡26の「背の低いタイプ」においても縮小化への傾向が始まっているようである。27の宮ノ前A遺跡の器台は、中位文様帶の上下に小さな円孔を縦に並べ、長方形透かしが中位文様帶を貫通しており、「背の低いタイプ」の「変異型」資料である。その他地域の宇土城跡城山遺跡の器台40は、形態的には「Aエリア」の「背の高いタイプ」の器台であり、

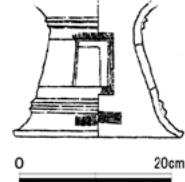


図7 肥前國府跡出土器台
(1/10)

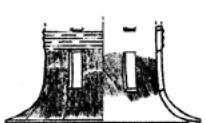
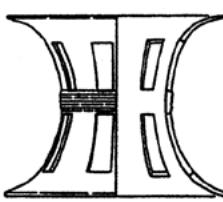
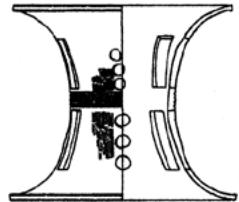
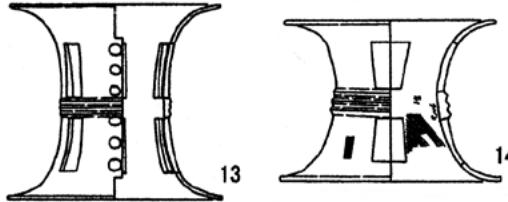
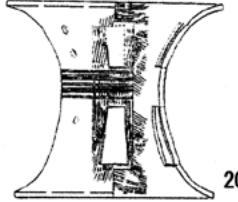
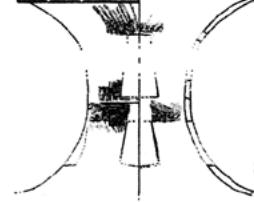
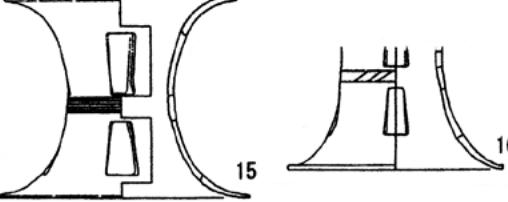
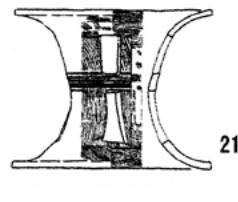
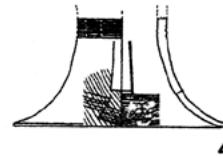
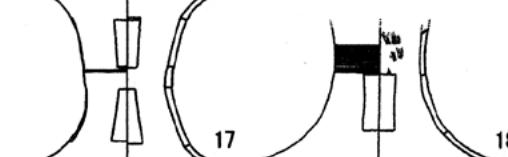
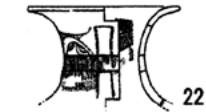
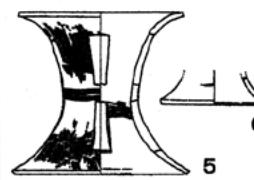
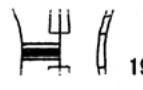
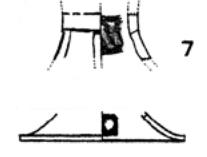
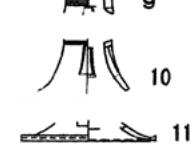
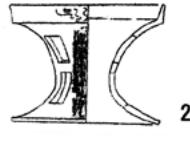
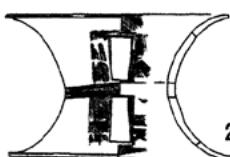
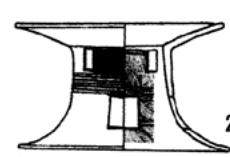
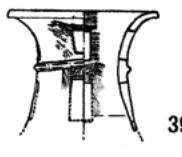
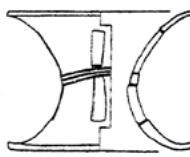
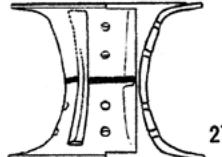
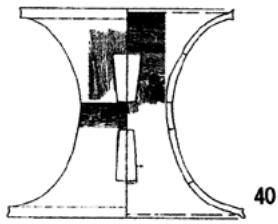
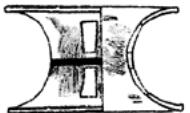
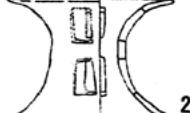
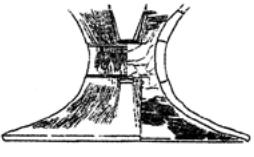
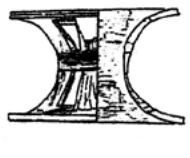
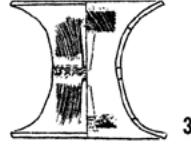
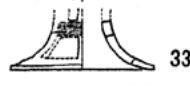
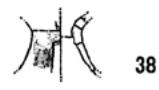
	A長崎本土地域	A武雄地域	B佐賀平野地域
I 期			
II 期			
III 期			
IV 期			
V 期			
VI 期		<p>1.三会西川溝 2.今福B地区3号溝I層 3.竹松3区SC3 4.門前2号集石土坑 5・6.龍王13・14区SB6 7.松尾土坑 8.有喜上原2号住 9～11.稗田住 12・13.みやこSK324 14.茂手SK509 15.茂手SK422 16.みやこSK404 17.茂手SK414 18・19.茂手SK422 20.東山田一本杉SB282 21.千住2区SK3135 22.惣座 23.久米方形周溝墓</p>	
VII 期			

図8 「肥前型器台」編年試案 (1/10)

C 筑後川・矢部川流域	D 菊池川流域	その他地域
		
		
		
		<p>24. 村中角 S D85 26. 牟田寄 S K179 25. 道蔵 S D 7 27. 宮ノ前 A 大溝上層 28. 山門ガラン 3号住 29. 山門ガラン14~16住 30. 蒲船津江Ⅲ区23号土坑 31. 蒲船津江Ⅱ区 32. 小川柳ノ内9号住 33. 西蒲池池淵41号土坑 34. 蒲生上の原11号住 35. うてな10-B区溝4層 36. うてな10-B区溝3層 37. 柳町 I 区 2号井戸 38. 柳町包含層 39. 三雲仲田 3号不整形土坑 40. 宇土城跡城山 41. 中原11231号住</p>
		
		

口縁・裾端部の拡張に特徴をもつ資料である。共伴している台付甕は島原系甕であり、臨海性の港湾集落に島原半島南部の海民が入植した可能性が推測され、地元で製作された「変異型」資料であろう。

IV期（後期末2段階）は、「Aエリア」の「背の高いタイプ」の器台においても、武雄地域の茂手SK414の器台など縮小化の傾向が目立ち始める。「Bエリア」の佐賀市惣座遺跡22は、「背の低いタイプ」で直弧文のような文様を線刻しており、上田龍児は瀬戸内との関係を示唆する資料としている（小田・上田2004）。「Cエリア」の「背の低いタイプ」のみやま市山門ガラン遺跡28・29ではより縮小化している。「Dエリア」の菊池市うてな遺跡溝4層の器台35は、中位文様帯の上下に小さな円孔を縦に並べた分厚い作りの器台である。「変異型」の資料である。41は唐津市中原遺跡の住居跡から出土した資料で、体中位の文様帯に波状の櫛目文を施す「変異型」の資料である。

V期（古墳前期1段階）では、「Aエリア」の長崎本土地域以外では、武雄地域の茂手SK422資料19がある。武雄地域では、現在、この段階以降の資料は確認されていない。茂手SK422は、出土土器が時期幅をもつ祭祀土坑であり、この土坑の最終的な葬祭行為としての器台資料と推測される。IV期に比べて縮小化が進んでいる。「Cエリア」では、上田龍児が臨海性集落とした柳川市蒲船津江遺跡23号土坑資料30をあげた。「Dエリア」では、うてな遺跡溝3層の器台36がある。体中位には波状櫛目文を施している。

VI期（古墳前期2段階）では、「Aエリア」長崎本土地域と「Cエリア」、「Dエリア」の資料をあげた。「Cエリア」の蒲船津江遺跡31は、縮小化・小型化が進んでいる資料である。みやま市小川柳ノ内遺跡32は、体中位幅に対して裾が拡がり、裾端部をより強調して拡張している資料である。「Dエリア」では、玉名市柳町遺跡包含層出土品37をあげたが、小型化が進んでいる。

VII期（古墳前期3段階）では、「Aエリア」長崎本土地域の大村市稗田住居資料9～11、「Cエリア」の柳川市西蒲池池淵遺跡33、玉名市柳町遺跡井戸資料38があげられ、極小化が進んでいる。「Bエリア」の小城市久米遺跡方形周溝墓の出土品23は、口縁部を二重口縁状に拡張させ線刻文様を施しており、雲仙市丸塚古墳出土器台（図6-57）と同様に、吉備南部地域で発達した特殊器台に系譜をもつ「首長靈繼承祭祀儀礼」の波及のなかで、特殊器台のように巨大化はしなかったが、「肥前型器台」を用いた祭祀とは別の意味をもって変容した「変容型」器台であったことが理解できよう。

卑弥呼共立によって広域にまとまった「邪馬台国連合」の余波をうけ、「肥前型器台」はIV期（後期末2段階）から縮小化の傾向が目立ち始める。集落や墓域においてさまざまな祭祀に用いられていた「肥前型器台」は、「初期ヤマト王権」の布留式土器様式と古墳祭祀の波及によって極小化して祭具としての力を失い、VII期（古墳前期3段階・布留1式）でその役目を終えたことが推測できよう。

6. おわりに

この論稿では、九州地方の有明海沿岸をA・B・C・Dの各エリアとその他の地域に分けて、「肥前型器台」の変遷について論述してきた。合同大会の成果として、「肥前型器台」には、「Aエリア」を主体とする「背の高いタイプ」の系列と「Cエリア」を中心とする「背の低いタイプ」の系列があることが判明した。前者を「肥前型器台A」、後者を「肥前型器台B」として区分することができよう。「肥前型器台」は、「海村」「港湾集落」を海上航路のネットワークで結んだ「海域社会」の海民によって

運ばれたことが推測され、「肥前型器台B」としても在地化した。「B～Dエリア」の河川水系における「流域社会」では、必要に応じて模倣されて使用された「変異型」と呼べる資料もある。また、弥生時代後期末段階において「首長靈繼承祭祀儀礼」の波及によって「肥前型器台」の縮小化が始まり、古墳時代初頭期における布留式土器様式と古墳祭祀の波及によって「変容型」と呼べる器台も創出された。そのような社会変動のなかで「肥前型器台」は極小化し、祭具としての意義を失って消滅したものと考えられる。以上が本稿の概要である。だが編年案などについては、試案の部分が多くを占め、まだ充分とはいがたい。皆様からのご指導、ご叱正をお願いしたい。

2015年の九州考古学会と長崎県考古学会の合同研究大会の成果については、報告書としてまとめようとした話が進んでいた。しかし筆者の入院などの事態があり、その後裁ち切れになっている。今回、小稿ではあるが「肥前型器台」についてまとめることができ、責任の一端を果たしたことになる。だが、合同大会で石橋新次らによって提起された「肥前型器台」をめぐる社会的背景の問題が、まだ重要な課題として残されている。そのことについては、別途、機会を設けて責を果たしたい。

おわりに、双方の合同大会がなければ、「肥前型器台」をこのようなかたちでまとめることはできなかった。長崎県考古学会との肥後考古学会、九州考古学会の両合同大会の関係者の皆様に感謝を申し上げたい。そして、研究会に参加された皆様方の研究の進展を祈りたい。

註

- 1) 龍王遺跡 13・14 区 S B 6 からは、体中位幅 13.4 センチの器台破片が出土しているが、混入品と判断した。

基本となる文献

- 1 肥後考古学会・長崎県考古学会 2014『肥前型器台について』 肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会資料集

- ①宮崎貴夫「肥前型器台および長崎県の状況について」 ②熊代昌之「福岡県における装飾器台の分布について」
- ③石橋新次「佐賀県における『器台』について」 ④檀佳克「菊池川流域の『器台』について」
- ⑤手柴友美子「熊本県内陸地域の器台について」 ⑥西山由美子「熊本県南部沿岸地域の器台について」
- ⑦吉本美咲「鹿児島県域の器台について」

- 2 長崎県考古学会・九州考古学会 2015『有明海とその周辺をめぐる弥生文化の交流』 長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会

- ①宮崎貴夫「台付甕と透かしをもつ器台の成立と消滅」 ②宮崎貴夫「長崎県本土地域の状況について」
- ③石橋新次「佐賀県における台付甕と透かしをもつ装飾器台」
- ④檀佳克「甕形土器と器台からみた熊本と周辺地域との交流」 ⑤上田龍児「福岡県の状況」
- ⑥中村直子・吉本美咲「鹿児島県域の台付甕と器台」 ⑦河野裕次・葉畑光博「宮崎県の状況について」
- ⑧坪根伸也「大分県の状況について」
- ⑨田崎博之「『台付甕』と『透かしをもつ器台』をめぐる東からの視点」・追加資料「『肥前型器台』をとりまく九州東半部・瀬戸内・畿内の器台」

参考文献

- 石橋新次 2012 「六角川流域の弥生時代遺跡」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』 長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会
- 大野安生他編 2003 『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 v o 1 . 3』 大村市文化財調査報告書第25集 大村市教育委員会
- 大橋雅也 1992 「器台形土器」『吉備の考古学研究』上 山陽新聞社
- 小田富士雄 1967 「弥生土器」『深堀遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告書第5集 長崎県教育委員会
- 小田富士雄・上田龍児 2004 「長崎県・景華園遺跡の研究」『長崎県・景華園遺跡の研究、福岡県京都郡における二古墳の調査、佐賀県・東十郎古墳の調査』 福岡大学人文学部考古学研究室
- 蒲原宏行 2019 『弥生・古墳時代論叢』 六一書房
- 川瀬雄一編 1995 『小野曾屋遺跡』 諫早市埋蔵文化財調査協議会
- 九州前方後円墳研究会 2017 『九州島内における古式土師器』 第19回九州前方後円墳研究会 長崎大会
- 久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』 XIX 庄内式土器研究会
- 久住猛雄 2015 「『奴国の時代』の歴年代論」『新・奴国展』 福岡市博物館
- 杉原敦史編 2020 『竹松遺跡V』 新幹線文化財調査事務所調査報告書第12集 長崎県教育委員会
- 副島和明編 2006 『門前遺跡』 長崎県文化財調査報告書第190集 長崎県教育委員会
- 武末純一 2009 「三韓と倭の交流—海村の視点から—」『国立歴史民俗文化博物館研究報告』第151集 国立歴史民俗文化博物館
- 田崎博之 1993 「弥生時代の漢鏡」『社会科』学研究』第25号 「社会科」学研究会
- 辻田直人編 2002 『松尾遺跡』国見町文化財調査報告書第2集 国見町教育委員会
- 辻田直人・小野綾夏編 2008 『龍王遺跡III』 雲仙市文化財調査報告書第3集 雲仙市教育委員会
- 常松幹雄 1991 「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢』 III 早稲田大学出版部
- 中川潤次編 2019 『竹松遺跡IV』中巻 弥生・古墳編 新幹線文化財調査報告書第11集 長崎県教育委員会
- 橋本幸男・稻富裕和 1988 『稗田遺跡』 稗田遺跡調査会
- 馬場晶平 2018 「九州島内における古式土師器—肥前西部—」『西海考古』第10号 西海考古同人会
- 原田保則編 1986 『みやこ遺跡』『茂手遺跡』 武雄市文化財調査報告書第15集 武雄市教育委員会
- 古門雅高編 2018 『竹松遺跡III』 新幹線文化財調査報告書第6集 長崎県教育委員会
- 古田正隆 1978 『杉山古墳調査報告書』 吾妻町教育委員会
- 町田利幸・宮崎貴夫編 1986 『今福遺跡III』 長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
- 松藤和人・古田正隆他 1975 『口之津貝塚及び口之津烽火台遺跡調査報告』百人委員会文化財調査報告第5集
- 宮崎貴夫編 1984 『今福遺跡 I』 長崎県文化財調査報告書第68集 長崎県教育委員会
- 宮崎貴夫編 1985 『今福遺跡 II』 長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会
- 宮崎貴夫 2019 「環有明海とその周辺をめぐる交流と変動」『長崎地域の考古学研究』 自費出版